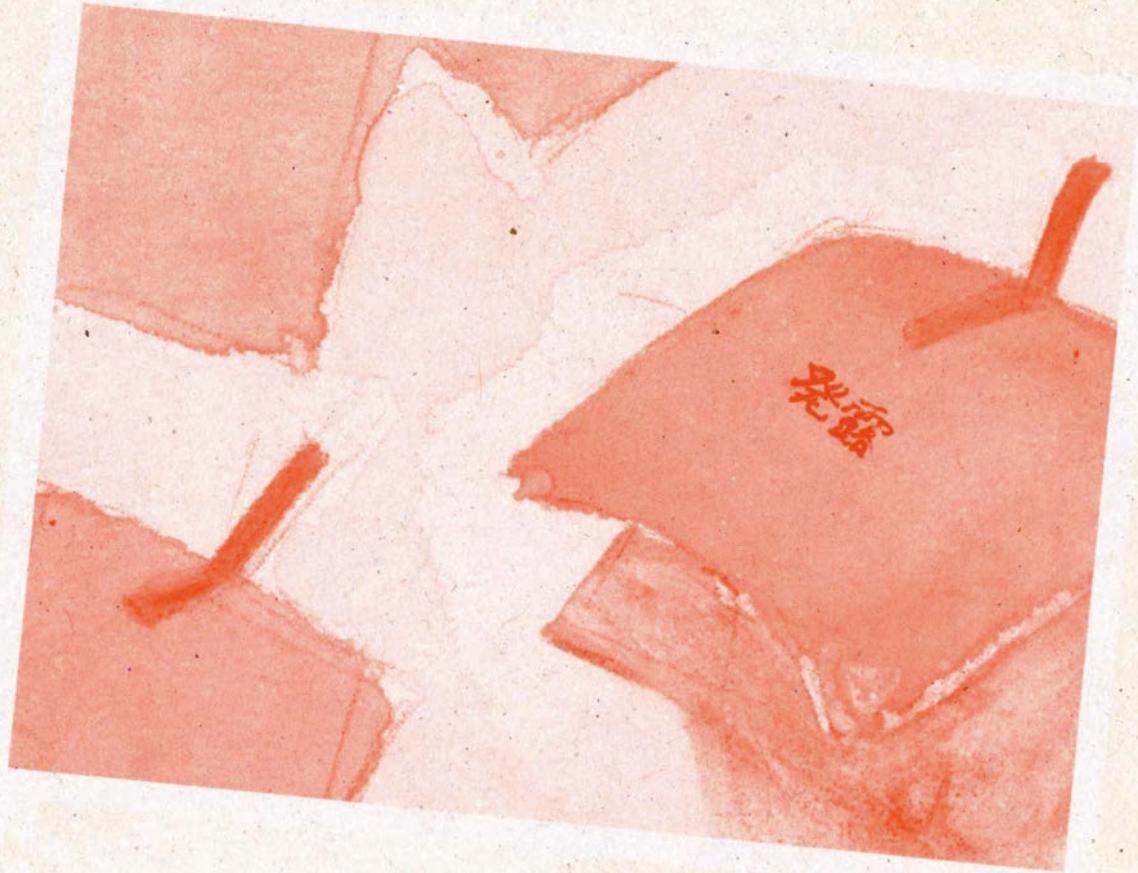


REPORT @KCUA

ISSN 2435-6018



2021-2022

Kyoto City University of Arts
Art Gallery @KCUA

Table of Contents

目次

- 15 特別展 | Special Exhibitions
- 75 申請展 | KCUA Open Call Exhibitions
- 92 アウトリーチ | Outreach
- 94 印刷物 | Printed matter
- 96 刊行物 | Publications
- 100 @KCUAについて | About @KCUA
- 102 運営委員会 | Steering Committee

COVER PICTURES

mamoru

「おそらくこれは展示ではない（としたら、何だ?）」

〔アーカイヴ〕に触発される思索を体現するという問いからはじまったこのプロジェクトは、想像を喚起する言葉やイメージ、そして歴史の中に埋もれてしまった小さな出来事に意識を向けて、全感覚を傾けそれを聴き、探究するアーティストのmamoruを含む6人の「プレイヤー」の「プレイ」によって、展示会場と特設ウェブサイトの2箇所にて、phase 0, 1, 2, 3の4段階で展開していきました。展示会としての会期が終了してからも、プロジェクトのアーカイヴについて考える「プレイヤー」の「プレイ」は続き、「何だ?」についてさらに思索をめぐらせ続けました。そして、2022年10月4日に本? / ウェブアーカイヴ / アルバム、と複数形式のアーカイヴがローンチされました。

(pp. 45-64)

イラスト：松元悠

凡例

- ・ 肩書きは2021年度当時のものを記載
- ・ 特に会場名の明記のないものは京都市立芸術大学ギャラリー @KCUAにて実施
- ・ All exhibitions and events were held at Kyoto City University of Arts Art Gallery @KCUA unless otherwise noted.

REPORT @KCUA 2021-2022



KAWARI STONE

GOO

NAZ

どうした世界

具体的なマ
おとらこ
[ア-カイア]の声
何に
これそがリア

Kyoto City University of Arts Art Gallery @KCUA 2021-2022

「@KCUA (アクア)」とは、京都市立芸術大学の英語表記「Kyoto City University of Arts」の頭文字に場所(サイト)を示す「@」を付けたもので、音読するとラテン語の「アクア=水」となります。生命を養う水のように、芸術が人々の暮らしに浸透し、創造力豊かな社会に貢献するという本学の理念を表現しています。

京都市立芸術大学ギャラリー@KCUAでは、その名に込められた思いのもとに、流動体のように軽やかに、アートとひとつをつなぐ活動を行っています。@KCUAとその周辺に広がる創造活動によってまかれた種が、やがてその枝を伸ばして大きな木となることを願いながら、展覧会だけにとどまらず、多岐にわたる事業を手がけています。

コロナ禍2年目となった2021年度。臨時閉館や展覧会・イベントの変更など、何をするにも予定通りにはいかない日々が続きました。アーティストとオンラインでコミュニケーションを取りながらの準備作業も相変わらずです。しかし、長期化する困難な状況をどのように捉え、ポジティブなアイデアにつなげていくかを探求するうち、パンデミック以前よりも柔軟に物事に取り組むことができるようになったと感じます。先行きの不明瞭さや制約の多さなどのネガティブな要素は、視野を広げ、これまでには思いつかなかったような方法を試すきっかけを与えてくれるものにもなりました。振り返ってみると、もしかすると以前よりもさらにユニークな、@KCUAだからこそ可能な活動が実施できた1年だと言えるかもしれません。



See p.65

2021.4.17 Sat.- 7.11 Sun.

第22届“传承”计划 2021



See p.71

2021.4.17 Sat.-6.20 Sun.

「Suujin Visual Reader 崇仁絵讀本」刊行記念展



2021.6.19 Sat. - 8.15 Sun.

Slow Culture

See p.17



2021.9.1 Wed. - 9.19 Sun

Lost in Translation

See p.77

See p. 31

2021.10.5 Tue.-10.31 Sun.

KYOTO EXPERIMENT 2021 AUTUMN
チェン・ティエンジュエオ「牧羊人」



2021.11.13 Sat.-12.5 Sun.

Still life - まだ、生きてます

See p. 83





See p. 45

「グーティツ」の声を聴き、守衛すること

2022.1.4 Tue. - 3.21 Mon.

mamoru 「おそろしくこれは展示ではない。(もしたら、何だ?)」

SPECIAL EXHIBITIONS

Curated by
Kyoto City University of Arts
Art Gallery @KCUA

特別展

「特別展」とは、@KCUA学芸スタッフの企画による展覧会です。芸術を育む場所である芸術大学のサテライト施設＝発信拠点である@KCUAでは、作品について「考える」「作る」プロセスを公開する場として、また大学だからこそ可能な先駆的・実験的な事業を展開しています。京都市立芸術大学の卒業・修了生を中心とした若手アーティストの支援、国際的に活躍するアーティストの創造と実践に触れる機会の創出、研究に根差した高い専門性を持つプロジェクト、また2023年に予定された大学キャンパス移転に向けたプロジェクトなど、多種多様な企画に取り組んでいます。

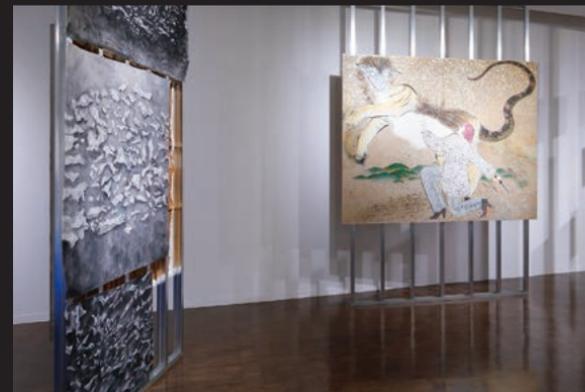
Slow Culture *Slow Culture*

磯村 暖、皆藤 齋、川田知志、木村翔馬、谷原菜摘子、谷本真理、永井麻友佳、NAZE、堀 奏太郎、松平莉奈、渡辺千明、吉田桃子
Sotaro Hori, Dan Isomura, KAITO Itsuki, Satoshi Kawata, Shoma Kimura, Rina Matsudaira, Mayuka Nagai, NAZE, Natsuko Tanihara, Mari Tanimoto, Momoko Yoshida, Chiaki Watanabe

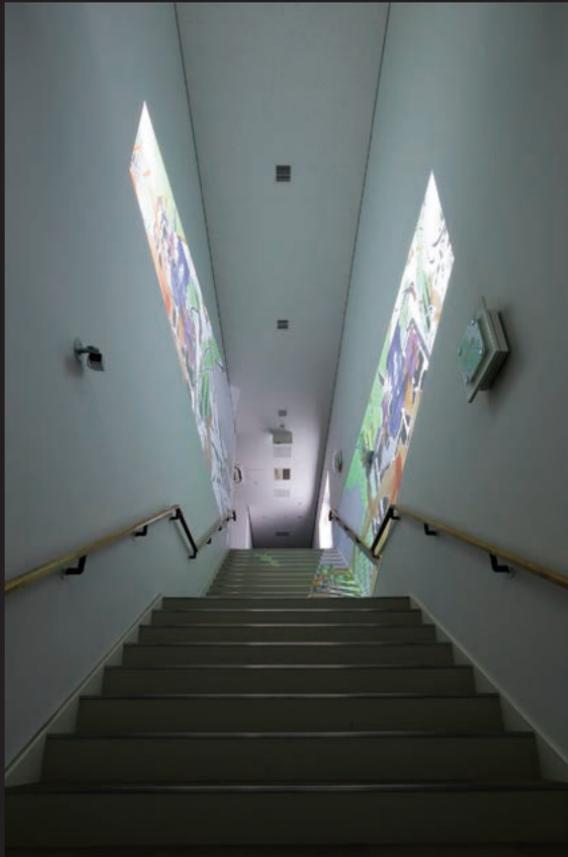
2021.6.19 Sat.-8.15 Sun.













誰もが写真や映像を撮影し、大量の画像データとして即時に共有することが日常となったスピーディな現代において、画材を手にして描くことや、その表現を鑑賞することの意味や可能性は、デジタル化の加速に比例するかのよう、増幅と変容を続けているのかもしれませんが。本展では、80年代後半から90年代前半生まれのアーティストを特集し、描き手の身体とダイレクトに結びついた物質的な実践としての「絵」をテーマとしました。新進のアーティスト12名による、近作と新作を含むおよそ50点の作品を展示。彼／彼女らの実践を辿りながら、現代の絵とその周辺に光を当てました。日常における切実なテーマや、ユースカルチャーの影響などを発想のもとに描き出された作品を通して、生と死、公と私、循環、流動的なアイデンティティなどにまつわる、現代のビジョンの一端を多様なイメージで紹介するとともに、VRや3DCGなどを用いてデジタル特有の概念と交差する創作アプローチにも接近しました。デジタル文化の浸透にもともって進化を遂げる、現代の新しい感覚によ

る描画表現の可能性にも注目しながら、仮想と現実の往還が活発化する今日のリアリティの中で「絵」の在り方を考える試みとなりました。

本展は、新型コロナウイルス感染症のパンデミックの影響を受け、当初の予定からまる一年の延期を経てようやくの開催となりました。観覧会へ足を運んで作品と対峙するというシンプルな美術鑑賞のあり方が「あたりまえ」ではなくなってしまっていた中で、やっとリアルでの鑑賞が叶うタイミングで会期を迎え、結果的に今回のテーマにより一層の深度がもたらされたと言えるかもしれません。

2021年6月19日（土）～8月15日（日）

Slow Culture

展示室：@KCUA 1, 2

開催日数：50日間

入場者数：1,832人

企画：京都市立芸術大学ギャラリー@KCUA

主催：京都市立芸術大学

助成：公益財団法人 朝日新聞文化財団

協力：EUKARYOTE、FINCH ARTS

写真 来田 猛

Photos by Takeru Koroda



Slow Culture #painting → #kogeji

「Slow Culture」は、観覧会というメディアの在り方を今のリアリティのなかで捉え直すためのプロジェクトです。この「Slow」には大きく二つの意味が込められています。一つは、ゆっくりとした速度自体を指す「Slow」、もう一つは効率や利便性を重視して物事をFastに進める社会へのカウンターとしての「Slow」です。そして、「Art」ではなく「Culture」という言葉を使うのは、表現行為を専門的な芸術の文脈だけに閉じ込めず、地域社会における個人の生活と地続きなふるまいの痕跡として地に足ついた視点から広く捉えたいという思いからです。

「もっと速く、手軽に」というファスト志向は現代の哲学として様々な分野に普及しています。大量迅速に商品や情報を生み出す技術革新は、これまで多くの利点とともに課題や問題をもたらしてきました。近年では加速度的に進化するデジタル技術が、かつてないスピードとスケールで社会を変えています。これまで以上に人・コト・モノはつながり、全世界規模に統合されています。膨大な量の情報を介した交流や議論が活発化するなかで、特定の地域で生まれた文化や価値観どうしの融合によって、グローバルで未来志向な新しいムーブメントをつくり出すことができるかもしれません。同時に、一部の文化や価値観が優位となれば、他の排除へつながりかねないリスクも孕んでいます。デジタル格差や数字至上主義、特定の規範やアルゴリズムに従わざるを得ない状況などに陥れば、むしろ多様性を失う可能性もあるからです。世界

が画一化へ向かう可能性については複数の見方があり、単純な結論に至ることはできません。しかし、効率や利便性の向上、ネットワークが夢見る新しい可能性と引き換えにして、つながりすぎたことによる弊害があらゆる脆さとなって、世界のそこかしこで表面化していることは間違いなさそうです。もはや人類は技術進歩のスピードについていくことができない時代に差し掛かったとも言われています。つながればつながるほど身動きがとりにくくなるパラドックスのなか、混迷した世界から抜け出すためには、普遍的な人々の営みや長い歴史によって培われた文化から、再び人間中心の価値を呼び覚ますことが求められているのかもしれない。

そのような時代に、展覧会というメディアはどのような役割を果たしうのでしょうか。オンラインの活用によって、表現鑑賞の手段の選択肢は広がりました。いずれ、美術館やギャラリーが、あえて足を運び限られた条件下で能動的に情報と向き合うための場所だと考えられるようになる日もくるかもしれません。こうした背景から、「Slow Culture」のプロジェクトでは、作品を展示された空間で鑑賞するというシンプルな行為自体を起点とし、広く速やかでグローバルな動きの中にある、狭く緩やかなローカルの可能性を探ろうとしています。そして、アーティストの鋭敏な想像力を同時代のローカルな感性をもって再解釈し、理想的な未来のビジョンを生産するための試みにおいて、それらの表現を世界に接続することを目指します。

2021年度実施の、絵画を扱った1回目に続く2回

目の「Slow Culture」では工芸に注目します。日本の工芸は、長い歴史の中で培われてきた素材の力を最大限に引き出す伝統的な技法と、洗練された手仕事の美しさで人々を魅了してきました。素朴で美しく機能的な日用品を生み出す工芸や、高度な技術で美の粋を極める美術工芸、実用性にとどまらない独自の表現メディアとしての工芸など、多様なあり方で展開しながら作り手の美意識やその時代の新しい思考を反映続けています。作品の使用や鑑賞の段階においても、思いがけない手法で情景を演出する「見立て」の文化や、モノと人の相互作用から生まれる新たな創造性が見られ、これらは日本の工芸に独自性をもたらす重要な要因であると考えられています。

漆・陶磁・染織・硝子・金工などの工芸や工芸的要素を取り入れる16名(組)の作家を取り上げて、現代の思考や感覚、新しい素材や技術、そして伝統を融合させた表現を紹介するとともに、自然環境や社会の問題に他ジャンルの専門家と連携して向き合う今日的な工芸観も見据えます。展示空間はデジタルの概念を引用して独自の彫刻観を探求する美術家の熊谷卓哉との協働により設計。会場に流れるサウンドを、美術と音楽をまたいで多才に活動する小松千倫が演出します。デジタルテクノロジーの加速度的な進化により、リアルとバーチャルが融け合う社会の状況を着想源とした「現代を表象する場」を設え、モノと場の調和や対比を生み出す実験的な空間に作品を展示します。

(岸本光大/©KCUA学芸員)

Slow Culture #kogei
2023.4.22 sat - 6.25 sun

石塚源太 [漆]
醜楠 [漆]
宇野湧 [陶磁]
織田隼生 [金工]
菊池處十 [染織]
木田陽子 [陶磁]
國政サトシ [染織]
西條杏 [陶磁]
佐々木萌水 [漆]
佐々木怜央 [硝子]
鈴木祥太 [金工]
つのだゆき [硝子]
土岐謙次 [漆]
西久松友花 [陶磁]
彦十時絵 [漆]
デヴィッド・ビランダー [金工]
—
熊谷卓哉 [美術]
小松千倫 [音楽]

KYOTO EXPERIMENT 2021 AUTUMN

チェン・ティエンジュオ「牧羊人」

Kyoto Experiment 2021 AUTUMN

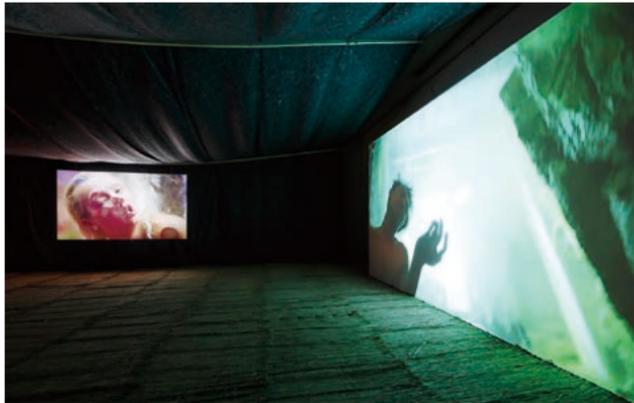
Tianzhuo Chen: The Shepherd



2021.10.5 Tue.-10.31 Sun.











「牧羊人」の巡礼

辻村優英（チベット仏教研究者／宗教学者）

なんと esoteric で、exotic で、eccentric な作品たちなのか。「牧羊人」には圧倒されるばかりだった。

チェン・ティエンジュオが帰依するチベット仏教にインスパイアされたインスタレーション《The Dust》では、出入口が棘付きの赤い格子戸になっていたことにまず目を見張った。それは血塗られた牢屋を彷彿とさせるからだ。周知のとおりチベットの宗教文化は文化大革命以前から中国共産党によって破壊されてきたし、未だに自由な信仰を禁じられている（観自在菩薩の化身とされるダライ・ラマ¹⁴世の写真を持っているだけで逮捕される）。そうしたチベットの悲惨を、棘付きの赤い格子戸が暗示しているかのようだ。

高山を流れ行く雲か、漂い来る護摩の煙か、縹渺たる霧に充ちた部屋には、風ではためくタルチョ（祈禱旗）を模した布が大きく吊られている。その一枚一枚の布のなかで、観自在菩薩やパドマサンバヴァの真言などを表すチベット文字に宝珠や仏塔といった図像と、英語の文章や矢印の記号や現代的なイラストとが混在する有様は、宗教的伝統と現代アートとのシンクレ

ティズムを感じさせる。部屋の中央に設えられた三面鏡のような巨大スクリーンの映像には、観自在菩薩の真言が彫られたマニ石、積み上げられた頭蓋骨、鳥葬場らしき場所などが現れ、死んでは生まれ変わることを繰り返す輪廻の世界に観る者を誘っているかのようだ。

ちなみに、観自在菩薩の真言オン・マ・ニ・ペ・メ・フーンは、チベット仏教徒にとって息をするかの如く自然と口に出てくるもので、『マニカンプム』(ma ni bkha' bum) というチベットの神話的な歴史書では、観自在菩薩の大きな共苦(大悲)の誓願、すべての有情(心を有する生きとし生けるもの)を輪廻の苦しみから解放しようという誓願を体現し、六道(天・阿修羅・人・畜生・餓鬼・地獄)への生まれ変わりを絶つ、すなわち輪廻から解脱するための真言とされている。

薄暗い空間に浮かび上がる巨大スクリーンの映像に意識を注いでいると、もしかすると死後の中有というのはいかような感じなのではないか、と想像を逞しくする。仏教で説かれる中有とは、死によって意識が身体を捨てて次の生を受けるまでの状態のことだ。大乘仏教圏に絶大な影響を与えた4-5世紀頃の仏教僧世親(Vasubandhu)が著した『阿毘達磨俱舍論』という仏典には、中有の状態にある者は、香を食し、業(カルマ)の神通力によって迅疾かつ自在に虚空(空間)を移動できる(釈迦ですら行く手を阻むことはできない)と記されている。スクリーンを介して、時には上空から山河を見下ろし、時には寺院の堂内で仏像を見上げ、時には不思議な視覚空間を漂うなど、様々な視点に切り替わる映像が目飛び込んでくる体験は、あたかも自らの意識が

迅疾かつ自在に虚空を歩き交うかのようだった。

《EXO-Performance/Beio》は日本に生まれ育った筆者にとって印象深く親近感を覚える映像作品だった。空海と弥勒菩薩を同じく表す梵字と「同行二人」および「迷故三界城 悟故十方空 本来無東西 何処有南北」(迷うが故に三界は城であり、悟るが故に十方は空である。本来東西は無いのだから、どこに南北があるか)という文字が入った四国遍路の菅笠を被り、修行や布教などで遊行僧が各地を巡り歩く際に用いる錫杖を手にした人物が、モーションキャプチャを介してコンピュータグラフィックスで描かれた金色の角を持つ厳めしい龍と、雷轟電撃なる嵐の中で重なり合う。そういえば、この展覧会が開かれているギャラリー@KCUAの目と鼻の先には神泉苑があり、今は昔、早魃による被害が甚だしかった天長元年(824)、淳和天皇の勅により、空海がそこで雨請いの法を修した際、天竺の阿闍達智池から勧請されて金色の蛇の姿で現れた善如龍王は、長谷川等伯がそうしたように人と龍とが重なり合う像容で描かれることがある。『今昔物語集』などに記される神泉苑での雨請いによって空海が見事に降らせた雨は、約1200年の時を超えて目前のスクリーンに投影された映像と同じく疾風迅雷を伴ったのであろうかと、脳裏で交わる今と昔に思いを馳せる。

「自在なる者」を意味する《ISHVARA》は、ある種の灌頂を受けずして観てはならないと思わせる戦慄すべきパフォーマンス映像だった。角を生やした異形の女性たちが乳房と陰毛を顕わにして踊り狂い、sattva(有情)の文字が記された白い台の上で両手を縛られて囚われた妙齡の女性の身体を撫でまわし喚

ぎまわし舐めまわし、イーシュヴァラ(Isvara)の異名を持つヒンドゥー教の神シヴァを崇拜する修行者サドゥーの異端アゴーリを思わせる男性が灰を塗りたくったかのような身体から性器を顕わにして赤い粉の入った器に放尿し、その尿と赤い粉を混ぜ合わせた液体を目前の人物の頭頂に灌いで顔に塗りたくり、果てにはその真っ赤な液体を自分の舌でペロリと舐め、地面に横たわった死体を思わせる人物を踏みつけにする。そうして繰り返される不気味で思議を超えた魅惑的で畏るべき世界の緊張が頂点に達した時、中央に卍を配した舞台の袖で巨柱に刻まれた「迷故三界城 悟故十方空」の文字が純白の光を煌々と放つ。その光に照らされていると、ふと、泥中より出づる清浄な白蓮を想い、煩惱即菩提について能々思量すべきことを思う。

「牧羊人」、そこから直観したひとつのコンセプトがある。それは「巡礼」だ。複数の宗教を股に掛けた「巡礼」、宗教と現代アートを股に掛けた「巡礼」、そしてチェン・ティエンジュオの内的世界と外的世界を股に掛けた「巡礼」。おそらくそれは、有情の業が引き起こす輪廻の如き巡りであり、もしも終わりがあれば、それは解脱と同じく、業の因果を出離して、「かくの如く去った者」(如去=如来)となった時なのかもしれない。

KYOTO EXPERIMENT との協働事業として、パフォーマンスから映像、デザイン、ファッション、電子音楽、宗教まで、ジャンルやメディアを自由に横断する中国ミレニアル世代の旗手、チェン・ティエンジュオによる日本での初個展を開催しました。チェンの作品制作の過程において、パフォーマンスはのちに独立した映像作品へと発展を遂げ、それをさらに彫刻や絵画、空間と融合させることで、新たなパフォーマンスの舞台を生み出し、創造的で有機的な進化を重ねています。本展のタイトルである「牧羊人」(ムヤンレン)は、中国語で「羊飼ひ」を意味し、多くの宗教において「失われた魂の探究」を意味するメタファーであり、転じて精神的変容の出発点を象徴します。チベット系仏教の信者であり、現代のクラブカルチャーにも精通するチェンの手によって、神秘的な宗教儀式とレイブパーティが混淆したような祝祭的空間が演出されました。最新の映像作品《The Dust》にもとづいたパフォーマンス的なインスタレーションのほか、旧作の《TRANCE》や《ISHVARA》、《An Atypical Brain

Damage》なども紹介し、キッチンでクイア、そして恍惚に満ちたチェンの精神世界へ多面的に接近する貴重な機会となりました。



2021年10月5日(火) -10月31日(日)
KYOTO EXPERIMENT 2021 AUTUMN
チェン・ティエンジュオ「牧羊人」

展示室：@KCUA 1, 2, Gallery B, C
開催日数：24日間
入場者数：1,394人
企画：KYOTO EXPERIMENT、京都市立芸術大学
ギャラリー@KCUA
制作：partner in crime
主催：KYOTO EXPERIMENT、京都市立芸術大学

関連イベント

- ・10月1日(金) 16:00-20:00
ニュー・ブランシュのための展覧会特別プレビュー
- ・10月2日(土) 16:00-19:00
ライブパフォーマンス
出演：Eartaker, Prettybwoy,
Violent Magic Orchestra
- ・10月3日(日) 16:00-19:00
ライブパフォーマンス
出演：Mars 89, Violet Magic Orchestra,
¥0USUKE ¥UK1MATSU

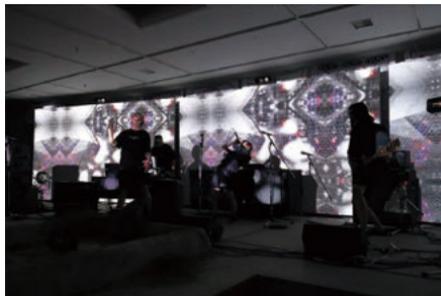


写真 来田 猛 (展示)、前谷 開 (パフォーマンス) / 装典：KYOTO EXPERIMENT
Photos by Takeru Koroda (Exhibition), Kai Maetani (Performance, courtesy of KYOTO EXPERIMENT)

「おそらくこれは展示ではない(としたら、何だ?)」
mamoru: THIS probably IS NOT AN EXHIBITION (then otherwise what?)

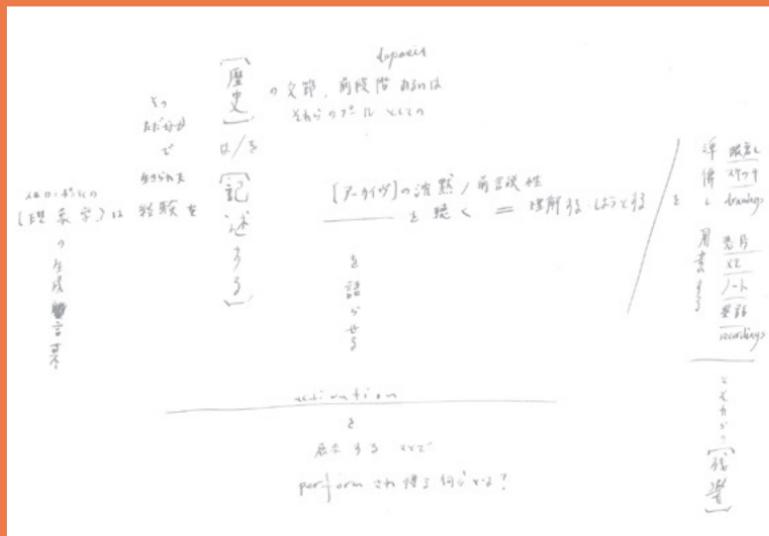
mamoru、池田精堂、仲村健太郎、小林加代子、松本久木、藤田瑞穂
mamoru, Mizuho Fujita, Seido Ikeda, Kayoko Kobayashi, Hisaki Matsumoto, Kentaro Nakamura



phase 0: 2021.12.11 Sat.-12.26 Sun.
phase 1, 2, 3: 2022.1.4 Tue.-3.21 Mon.

2023年のキャンパス移転に向け、京都市立芸術大学（京都芸大）では、本学独自の「知と創造のありか」を探求し、教育・研究・創造の連携を図るための議論を進めています。@KCUAでは、本学芸術資料館が有する芸術資料を新たな視点から調査・研究・活用することを目指した実験的な展示会に取り組んできました。これらの展示会で試みてきた芸術資料の「活用」に共通するのは、資料が収蔵されてから現在に至るまでの、収蔵品の背景にある／あった物事を推察し、そこから新たな語りのあり方を探ろうとする姿勢です。2021年度は、想像を喚起する言葉やイメージ、そして歴史の中に埋もれてしまった小さな出来事に意識を向け、全感覚を傾けそれを聴き、探究するアーティストのmamoruと協働し、〔アーカイヴ〕の声を聴き、考察するためのプロジェクトを立ち上げました。3ヶ月にわたって続くこのプロジェクトは、展示会場と特設ウェブサイトの2箇所にてmamoruを含む6人の「プレイヤー」の「プレイ」によって、phase 0, 1, 2, 3の4段階で展開していきました。

mamoru 〈思索の地図〉 2021.12



「おそらくこれは展示ではない（としたら、何だ?）」プレイヤー：mamoru：今回のプロジェクトの発案者。プロジェクトの発信源となるハイパーテキストの執筆者。そのテキストは転じて各プレイヤーに向けた投げかけでもあり、時にはスコア的なものにもなっているのので、いわばコンポーザー的のバンドリーダー的な役割のプレイヤー（相当な部分が各プレイヤーにゆだねられているため、プロジェクトを「私の作品」のように考えていない）。2階のシアタールームの映像出品者。

池田精堂：会場を舞台に設営作業＝展示技術を用いたパフォーマンスを行う。仲村健太郎、小林加代子（Studio Kentaro Nakamura）：特設ウェブサイトならびに関連資料のデザインを担当。松本久木（有限会社松本工房）：「第十門第四類」のプレイヤーならびに@KCUA会場のビジュアルデザインを担当。藤田瑞穂（@KCUA）：「第十門第四類」構成、各フェーズでの変化に伴ってアップされるテキストと記録、プロジェクトの企画・運営を担当。

京都市立芸術大学芸術資料館収蔵品活用展

「第十門第四類」

(mamoru「おそらくこれは展示ではない(としたら、何だ?）」phase 0)

University Art Museum, Kyoto City University of Arts Collection Exhibition:

No. 10-4

(mamoru: THIS probably IS NOT AN EXHIBITION (then otherwise what?) phase 0)

池田雲樵、今尾景年、幸野樺嶺、巨勢小石、鈴木松年、竹内栖鳳、谷口香嶠、原在泉、mamoru、望月玉泉、山元春挙
Zaisen Hara, Unsho Ikeda, Keinen Imao, Bairei Kono, Shoseki Kose, mamoru, Gyokusen Mochizuki, Shonen Suzuki, Seiho Takeuchi,
Kokyo Taniguchi, Shunkyo Yamamoto



2021.12.11 Sat.-12.26 Sun.

プロジェクトの初手となる「phase 0」では、芸術資料館収蔵品活用展「第十門第四類」として本学所蔵資料の展示を行いました。「第十門第四類」とは、本展で取り上げた、明治期から続く図書台帳の「第十門（粉本類）」の「第四類」として分類された写生用手本画を指します。学校の創立当初、教材として活躍したこれらの手本画は、教育方針の変化とともに実用されることが少なくなり、第二次世界大戦後の昭和26年の再分類時には図書台帳から「割愛」されます。やがて昭和57年に所蔵資料の再整理が始まると「第十門第四類」を含む非現用資料も博物館資料として登録され、歴史を考察する上での研究対象となってその価値、役割が変化していきました。「第十門第四類」では、これら資料にまつわるエピソードを、mamoruが本プロジェクトのために制作した〈思索の地図〉(p.46参照)にある、〔歴史〕を〔記述〕しようとするために〔アーカイヴ〕を〔聴く〕という行為のある一つの形だと捉え、資料とその保存の歴史に着目しました。

展示室には、これから起こる何かを示唆するかのように、収蔵品以外に1点、mamoruの自宅の天井からやってきた紙飛行機を絵手本の上空に設置しました。

第十門 第四類

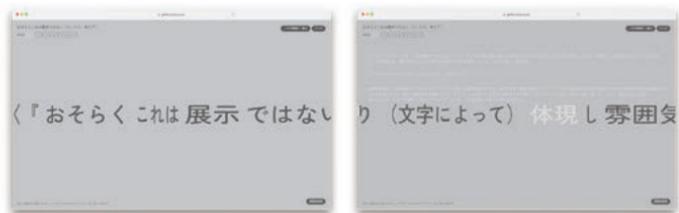


2階の展示室 (@KCUA 2) では、mamoru による自作・改造楽器、ループペダルなどの機材を用いた即興演奏の記録映像「おとづれ」(2007年6月9日七針(東京)、9月15日 Bank Art NYK hall(神奈川))とスコアやカードなどの資料(つまりmamoru自身の「アーカイヴ」)を、収藏品とともに展示しました。



また、phase 0 開幕と同時に、特設ウェブサイト(担当プレイヤー: 仲村健太郎、小林加代子(Studio Kentaro Nakamura))では、mamoru が自ら「グルーヴ体」と呼ぶ文章の独特のリズムがウェブ上に表現され、ハイパーテキストによって注釈、脱線、連想が交差しはじめました。

おそらくこれはスケジュールであり、スコアでもある(のか?) / mamoru (2022年3月1日アップデート版)



phase (0以前から) 0 (から1へ) 414-

京都市立芸術大学芸術資料館収藏品活用展「第十門第四類」を引き継ぐ(とは?) 準備として、

- 12月11日以降: 展示空間には「プロジェクト開始前」という胎動が持ち込まれ、その実プロジェクトは(とっくの前から、つまりphase 0以前が存在する)開始されていて、0から1へと向かっているから、その間に得た(6)考察、本プロジェクトを体現する方法・技法に関する思索、実験を起点にしたハイパーテキストをマテリアルにWeb空間の試験運用、それを経つつさらにphase 1へと向かう様がしれっと公開される。

phase (0以前から) 1 (から2へ) 438-

前のphaseで進め、深めた考察と、様々な資料やリサーチを通じ、過去のある場面における音風景を再生するなどしてきた「THE WAY I HEAR」シリーズ、を通じて取り組んできた想像で行うリスニング、を生み出す音的な記述、に関する考察を起点に、特に各プレイヤー間におこっているインタープレイとフィードバックの記録をどうするのかという点に留保しつつ、

- 1月4日(第一火曜日): mamoruよりハイパーテキストがGoogleドキュメントにアップされ、現時点以前のphase中のやりとりなどを受けた上でのプロジェクト・アップデートがアナウンスされる。空間が再公開され、1月11日の設営作業に関する発表がある。
- 1月11日(テキストアップ後の@KCUA休館日): 設営作業を実施する。他のプレイヤーの作業も上の期日を目安にすめる。
- *実作業が間に合わない場合は、少なくとも各プレイヤーはそのリアクションと今後試そうと思ったことと意図などを共有する。
- 1月12日以降: 変化した空間を受け、各プレイヤーからフィードバックがあり、次のphaseに関する方向性あるいは予感が交換・醸成され、随時、空間・紙媒体・Webにアップされることもある。
- phase移行前後にphase (0以前から) 1 (から2) に関してのレポート(<https://gallery.kcuu.ac.jp/articles/2022/8246/>)がアップされる。



mamoruの〈思索の地図〉(p.46参照)にある「activationを展示することでperformされる何かとは?」という問いを手がかりに、mamoruから送られてきた「THE WAY I HEAR」の関連資料に着想を得て、様々な視点からの記録(Aの視点から、Bの視点から、あるいはAとBの両方によって残された、あるものに関する記述。一つの物事を異なった視点から記録したもの)ならびにモノの軌跡についてのメモを作成し、空間にプレイヤーの思考を「アーカイヴ」することを試みました。そして――



ああ、そうか
そうだったんだ
そうそうそう

おもむろに
あるいは勝手に
私は

理解した
そうだ
これは

とうもろこしの桂剥きを知ったことで
わたしの発想が変化し
生まれた

橙（だいだい）の種を
さささっ!と
取ってしまう方法

学ぶとはそういうことだ
勝手に
やっちゃうんだ



絵手本にも同じ様なことが言えるだろう(か?)
絵手本の作者にとっては
そこに描かれた内容を描くことが

そもそもの目的ではなかった(はず?) →
描かれた内容を誰かが真似て描くこと →
そのことを通じて生まれる経験的な理解

を経て、別の何かを生み出すこと

それが目的?
つまりさ
お手本は道なの(かもしれない)

道ってどっていくと →
道の先へと通じていって →
どこか別の場所へ出るじゃない?

それってとうもろこしを桂剥く時にも言える
ことで →
と言いつつ、はっきりとは言えないけど →
これは何かのPART1 (だと思っんですよ)



を経て、別の何かを生み出すこと





橙（だいだい）の種のことだけではない→
 と言いつつ、はっきりとは言えないけど→
 紛れもなくまだ終わってない感じがしているから→

そう、思考は続く→
 THANKS FOR TUNING IN→
 アー、アー、アー♪

アーカイヴよ→
 俺の話は→
 お前となんらの関係もないかのようだ…
 が♪



どうだろう?→
 アーカイヴよ→

お前は経験を残すことができるか?
 お前は経験を生み出すことができるか?
 お前は経験を伝えることができるか?

一人の人間のライフスパンを超えて?
 いや、
 わたしが問うているのは
 アーカイヴではなく
 もう少し還元された「記述」に対してか?
 という気もする



どうだろう?
 記述よ

お前は経験を残すことができるか?
 お前は経験を生み出すことができるか?
 お前は経験を伝えることができるか?

(mamoru「20220108_とうもろこしの桂剥きにしたものを食べた経験が橙（だいだい）の種をさきさき取ってしまう方法を生んだ」より)

phase (0以前から) 2 (から3へ) 467-

前のphaseから続く思索、試作、思考、試行、錯誤、実験、考察を起点にしつつ、実現・実装にいたっていないアイデアをなんとかして、空間、紙媒体、Webに反映させることを目標に、

- ・ 2月1日(第一火曜日):mamoruよりハイパーテキストがGoogleドキュメントにアップされ、プロジェクト・アップデートが伝達されるかもしれないが、必ずしもハイパーテキストのアップデート版が公開され、2月7日の設営作業に関する発表があるわけではない。
- ・ 2月7日(テキストアップ後の@KCUA詳細日):設営作業を実施する。
- ・ 2月8日以降:一連の変化を受け、各プレイヤーからフィードバックがあり、次のphaseに関する方向性あるいは予感が交換・醸成され、随時、空間・紙媒体・Webにアップされる。
- ・ phase移行前後にphase (0以前から) 2 (から3) に関するレポート (<https://gallery.kcuu.ac.jp/articles/2022/8321/>)がアップされる。



「橙(だいたい)以下省略」に現れた何か、
この場合は「とうもろこし以下省略」に代表される
「何かしらを剥く方法」という
無形文化的なもの、が
「わたしは生きてきた」のひとつの発露であって、
芋づる式に、あるいは、原形追跡不可能なレベルで
あれやこれやの経験などが、一体化し、混在している、
リアル。
いやこれもう、当たり前なんですけどね、でも何かひっ
かかるんですよ、
もうちょっと掘り下げたら何かありそうなのになーっていう
そういうときあるじゃないですか？
そういうやつです、いま。
それで、何が言いたいかという・・・
影響とインスピレーションの速度の違いっていうか・・・
そもそも影響もインスピレーションも受けてありきなもので、
そこもまた考えに含めないといけないうですよ。
何かを残すときに、それが何であるか、何だと思われるのか
それがどのくらいの速度をもったものなのか、
規定できない
と思うんですけどね・・・

(mamoru「20220124_影響とインスピレーションの速度の違い」より)

phase (o以前から) 3 (からどこへ?) 494-

今回のプロジェクトは「何(だったん)だ?」と、最終的な考察をしつこく行う、が(あるいはそれによって)極力、断定的な振る舞いは回避、保留され、結論はどこまでも先送りされることが告げられる(んじゃないかと現時点では思っている)、だろうという考察を起点に、しつ、当初、

・3月15-21日(プロジェクト最終週):ハイパーテキスト、空間(6通室)の両方が日々アップデートを行うかもしれない。ひょっとすると現場にmamoruが入り、滞在するのだろうか? 関連動画はどんどんアップされ? 積極的に公開される?(としたら、何だ?)

としていたが、むしろmamoruはテキスト各種を3月1-7日に書き上げ、プレイヤー達と共有し、そこから何かが生まれるかもしれない最低限の時間を確保することを目指すということ。また3月7日前後に、@KCUAの1,2階展示室空間、特設Webサイト、紙媒体の全てがアップデートされるだろうこと。また、非公開ではあるが3月14日の休館日に全プレイヤーが@KCUAの空間に集合し様々なフィードバックがなされ、その様子が撮影されるだろうこと。14日の全プレイヤーミーティングの際に新たな動きがあるかもしれない、とは思いつつも、余程ことが無い限りは最後の1週間ほどはこのプロジェクトの余韻を響かせようと思っている、のでmamoruが滞在したり動画のアップはないだろうな、ということ。そしてやはり

・3月21日(プロジェクト最終日)以降:全くの未定、ということだけは決定している。



糸を縫う針のごとく・・・
phaseからphaseへと広がる水面
揺き分け進むこのテキストの
刻むその航路
は、エフェメラルな
空の轍
糸を縫う針のごとく・・・
結論は先送り
垣間見えるのはただの動き
かなり
アーカイヴには捉え難き
問いに問いかける、
空の空
いっさいは空？
で、割愛される？
と、軌跡はない？
予定通りに調和されはしない
じゃあパフォーマンスとは定義できない？
そうは言ってもパフォーマンスではないとも
言い切れない？
としたら、何だ？
と、逆照射
する、複数の意図が交差
し、プレイする果てに、
それぞれがノブを捻るEQ



高音域
中音域
低音域
少しずつずらし
ピントを合わし
見えない音像を捉えようとし
版を重ね
ながら、そもそも何にフォーカスするのかね？
と、さらに絞り疑う
ことを繰り返し
振り出しに戻し
留保する
のは、牛歩する
ある種の戦術でもある
断定を避ける
ことで、自らを開き続ける
ことで生まれ得る
メビウスの輪
的な、この種の円環は
ぐるぐると反芻
する、うちに、傾く
ただただ
想像は
可能だ
そうだ

それは
ありそうだ
と、(おそらく)
万感の想いを
込めた
ラスト・フライト
を、君は見たんじゃないか？
あるいはその響きを
どこかで聴いた
の、だろうか？
おそらくこれは展示ではない(としたら、何だ？)
と、ある朱に染まった
意図を
問う
間に

は
むしろ
逆(説)に飛ぶ？
の、だろうか？
と、想い巡らしながら
アイデアや理解なんてものは
いつも遅れてやってくるんだ
と、つぶやきながら
三月をむかえる、今



「何だ？」をめぐる、終わることのない思索

—phase [からどこへ | 記録/先送り]

はじめりがあるものには必ず終わりが、というのが世の定説。さて、このテキストを書いている2023年3月現在、はたしてこのプロジェクトは「終わった」のだろうか？ 会期は約1年前に終了し、その後の約半年にわたって、なぜか毎回どうしても2時間以上かかってしまうオンラインミーティングを重ね、2022年10月14日、プロジェクトの【記録】としての「リアル系アーカイヴ」（「おそらくこれはアーカイヴにはなり得ない（かもしれないが…そうとも言い切れない？）としたら、何だ？ phase [記録/先送り]」、通称：「オイル本」、詳細はp.99）」と「Web系アーカイヴ (<https://gallery.kcuu.ac.jp/mamoru/>)」の公開に至った。普通に考えて、プロジェクトとしてはいったん完了した体を成している。しかし「プレイヤー」たちによるFacebook Messengerのグループチャットは未だ途切れることなく続いている。それはプロジェクトの残響なのか、あるいはまだ完全に終わってはいないのか。そもそも、完全に終わる、とはどういうことなのだろう？ そんなことを考えてはまた思索の森に迷い込む。……なるほど。このプロジェクトに端を発するいくつもの「何だ？」について考えるのをやめない限りは終わらない、あるいは終わった気になれないのかもしれない。

「ん？ これ何だ？」とA事象に対して思ったときにわたしはA事象に対して生まれる。（ちなみに「あーこれね」と言う反応の場合はわたしには変化がなく何も生まれない、あるいはすでに生まれていただけの話。）それに対してA事象をスルーし「ん？ これ何だ？」と思わなかった人がいたとすれば、その人はA事象に対しては生まれていない。だとすれば当然わたしはA事象に関してその人にアクセスできない、というか断絶があることは致し方ない。これが「世に言う「考えれば考えるほど孤独になる」だ。Aと簡単に言っただけのAに近似したA1やA2'やAnというバリエーションで微細な差異を考えると、「何だ？」はいっただけで絶妙に入り組んだルートをたどり、後の祭り、そこは孤高なゾーンとなり、いやが応にも到達してしまう袋小路。

正確には疑問を持って持っただけ「わたし」が生まれ、生まれまくるのでその成長やら死やらその数だけ面倒見なくては行けない。そう面倒なんだよ「何だ？」は。

(mamoru「20220623_何だ?続編」より。2023年3月時点では未公開（会期後に書かれたため？ Web系アーカイヴ未収録であることを2023年3月6日に筆者発見))

2020年10月、mamoruに「京都市立芸術大学芸術資料館収蔵品活用展」とは「大学が持つ芸術資源（有形無形問わず）はどのように活用可能なかを考えるためのシリーズで、極端に言うとしてくるものは1点でも成立する」と説明したことからこのプロジェクトははじまった（それから2年半が経とうとしている現在は、1点どころか概念のみで物理的な収蔵品はなくても成立するんじゃないか、とすら思っている）。このことについて、後にmamoruは「『大学が持つ芸術資源』のより無形なものであると思われる「やってみる」みたいな大学が本来もっている「お仕事チックな“置きに行く”行為ではない」教育機関ならではのバッファを最大限に活かすことが下敷きになった末に（彼女は「第十門第四類」を作り出すプロジェクトの主要な一人のプレイヤーとなり、他のプレイヤーも加わり）今回のプロジェ

クトが「おそらく・・・」生まれたのだと思うとすでに感慨深い」(mamoru「20211011_おそらくこれは展示ではない（としたら、何だ？）_共有」注1-1)と振り返っている。

本学の収蔵品に限らず、古今東西のさまざまなアーカイヴは、何かのものごとの記録や痕跡として残されたものである。時とともに失われてしまったもの、人々の記憶からすっかり消えてしまったものも星の数ほどあったはずだ。私たちがいま目にするることができるのは、そうしたなかで失われることなく蓄積され、現在に至るまで保存されてきたものだけである。そして、それらも、あくまで過去のものごとに関する何らかの断片でしかない。どのように読み解こうとも、時空を超えて、それらが「生きていた」頃と同じように経験を得ることはできない。しかし、もしその記録から何かを感じ取り、そこからつながる別の何かについて思索を深めたりすることは可能だ。そうすればアーカイヴは、そこから派生した何かとともにいまの時代に接続され、新たな経験を生みだすものになり得る。

私は、こうした一連の行為がそのものが、アーカイヴの「活用」に重要な要素の一つだと考えている。「活」とは、「勢いよく動く、生き生きしている」こと、「生きる、暮らす」こと、「動きを殺さないで役立てる」ことなどを意味する文字だ。「何だ？」からはじまる思索と、それを体現しようとするための実験、その過程の試行錯誤——それはまさにこのプロジェクトでずっとやってきたことである。そして会期が終わってもなお「何だ？」は連鎖的にとめどなく発生し、「アイデアや理解なんてものはいつも遅れてやってくる (p.61参照)」がゆえに新たな発見も続く。そ

して「プレイヤー」たちは、この実験の結論を未来に先送りすべく、「オイル本」と「Web系アーカイヴ」をプロジェクトのphase [記録/先送り]として世に放ったのだった。

たとえ「プレイヤー」たち自身の探求が何らかの理由で停止したとしても、他の誰かが何らかの形でそれらを受け止めて、また何か動きは始めるかもしれない。つまり、必ずしも終わりがあるとは限らない、というわけだ。発生し続ける「何だ？」に思索をめぐるphase [記録/先送り]は、世の定説をも覆すかもしれない？ という希望に、きっと満ちている。

* 経緯については『おそらくこれはアーカイヴにはなり得ない（かもしれないが…そうとも言い切れない?）」としたら、何だ？ phase [記録/先送り]』の構成要素の一部である「ご依頼書」に詳細に記されている。それ以降、これまでの主要な動きは以下の通り。

- ・「Web系アーカイヴ」が東京TDC2023に入選。
- ・松本工房オンラインショップにて「オイル本」のやたら熱のこもった委託販売ページ (<http://shop.matsumotokobo.com/?pid=173071545>) が始動。
- ・2022年10月14日に行われた「オイル本」とWeb系アーカイヴの公開を記念したトークイベントの記録映像 (<https://vimeo.com/800238824>) を公開。
- ・2020年度の京都市立芸術大学芸術資料館収蔵品活用展からこのプロジェクトまでを論じた拙論「バンデミック後のイメージの行方——『静のアーカイヴ』から『動的イメージ』へ」を所収 (pp. 310-357) した『拡張するイメージ——人類学とアートの境界なき探究』（藤田瑞穂、川瀬悠、村津蘭編、亜紀書房、2023年）刊行。

それから……？

(藤田瑞穂/@KCUA チーフキュレーター/プログラムディレクター)

2021年12月11日(土) - 12月26日(日)
京都市立芸術大学芸術資料館収蔵品活用展
「第十門第四類」
mamoru「おそらくこれは展示ではない(としたり、何だ?)」 phase 0

展示室: @KCUA 1, 2
開催日数: 14日間
入場者数: 409人
企画: 京都市立芸術大学ギャラリー@KCUA
主催: 京都市立芸術大学
助成: 公益財団法人野村財団

(mamoru「おそらくこれは展示ではない(としたり、何だ?)」)



2022年1月4日(火) - 3月21日(月・祝)
mamoru
「おそらくこれは展示ではない(としたり、何だ?)」

展示室: @KCUA 1, 2
開催日数: 67日間
入場者数: 1390人
企画: 京都市立芸術大学ギャラリー@KCUA
主催: 京都市立芸術大学
助成: 公益財団法人野村財団
(mamoru「おそらくこれは展示ではない(としたり、何だ?)」)

関連イベント

- ・ 2022年7月7日(木) 18:00-19:00
公開アーカイビング「おそらくこれはアーカイブにはなり得ない(かもしれないが...そうとも言い切れない?)としたり、何だ?」
出演: mamoru
- ・ 2022年10月14日(金) 18:00-19:00
「おそらくこれはアーカイブにはなり得ない(かもしれないが...そうとも言い切れない?)としたり、何だ?」
ローンチ記念トークイベント
出演: mamoru, 池田精堂、小林加代子、仲村健太郎、藤田瑞穂、松本久木

写真 来田 猛
Photos by Takeru Koroda

京芸 transmit program 2021

KCUA Transmit Program 2021

大槻拓矢、岡本 秀、北浦雄大、棒立ち
Yudai Kitaura, Shu Okamoto, Takuya Otsuki, Bodachi



2021.4.17 Sat. - 7.11 Sun.

(新型コロナウイルス感染症予防の観点から2021年4月25日(日) - 5月31日(月)まで臨時休館。展示室変更のため6月7日(日) - 11日(金)まで非公開)



岡本 秀 Shu Okamoto



北浦雄大 Yudai Kitaura



大槻拓矢 Takuya Otsuki



棒立ち Bodachi

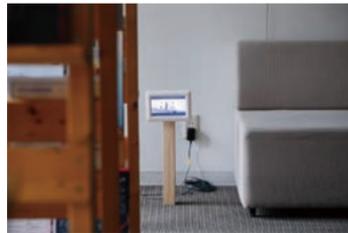




「京芸 transmit program」は京都市立芸術大学卒業・大学院修了3年以内の若手作家の中から、いま、@KCUAが一番注目するアーティストを紹介するプロジェクトです。

本展では、写生や模写から得た諸物を画面に配置することの行為性に着目しながら、絵画における図像と空間の関係性について考察する大槻拓矢（日本画）、美術史を中心的な主題として古典絵画から現

代の視覚メディアまでの幅広い平面表現を研究しつつ、日本画の技法を使用した絵画制作を行う岡本秀（日本画）、縄文時代より続く日本の自然への信仰・生命・精神などにインスピレーションを得ながら、それらを独自の感覚と類稀なる表現力によって現代の世界に接続する漆造形を手掛ける北浦雄大（漆工）と、この3名の作家によるバンド「棒立ち」による展示を行いました。



2021年4月17日（土）-6月6日（日）
 （再公開版）2021年6月12日（土）-7月11日（日）
 京芸 transmit program 2021

展示室：@KCUA 1
 開催日数：13日間
 入場者数：605人
 （再公開版）
 展示室：Gallery B, C
 開催日数：26日間
 入場者数：1,011人
 企画：京都市立芸術大学ギャラリー@KCUA
 主催：京都市立芸術大学

関連イベント
 ・4月17日（土）14:00-15:00
 棒立ちのオープニングトーク
 ・5月8日（土）14:00-14:30
 棒立ちのギャラリーツアー（開催中止）
 ・7月10日（土）20:30-21:00
 棒立ちのエンディングライブ
 オンライン

写真 来田 猛
 Photos by Takeru Koroda

『Suujin Visual Reader 崇仁絵読本』刊行記念展 The publication commemorative exhibition: Suujin Visual Reader

ジェン・ポー、森 夕香
 Zheng Bo, Yuka Mori



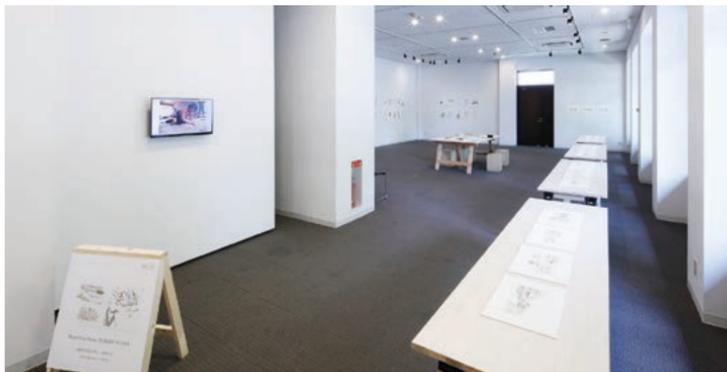
2021.4.17 Sat.-6.20 Sun.

（新型コロナウイルス感染症拡大予防の観点から2021年4月25日（日）-5月31日（月）まで臨時休館）



2019年5月、ジェン・ポーと@KCUAは、大学移転という次なる大きな変化を受け入れようとする崇仁地域を舞台に、さまざまな専門を持つ人々とともに、より良い生態学的未来、全ての種の生物における平等をめぐるワークショップ「Eco-FuturesSuujin」を実施しました。その記録や成果物は、ジェン・ポー「Dao is in Weeds (道在柳稗/道(タオ)は雑草に在り)」(2019年6-7月)にて、崇仁地域についての学びを深めるための空間「Suujin Study Room」として公開されました。『Suujin Visual Reader 崇仁絵読本』は、

同展の「Suujin Study Room」で展示した草案をもとに、より魅力的で、手に取る人が大切にしたいような本を目指して編集作業を続け、1年半あまりの時間をかけて作り上げたものです。挿画は、ジェン・ポーの提言したワークショップの参加者であり、崇仁地域にあるアトリエで制作活動を行う美術家の森夕香によって描かれています。刊行記念となる本展では、『Suujin Visual Reader 崇仁絵読本』原画、また森夕香が崇仁地域の植物をモチーフにした絵画作品などもあわせて展示しました。



2021年4月17日(土) - 6月20日(日)
『Suujin Visual Reader 崇仁絵読本』刊行記念展

展示室：Gallery A
開催日数：25日間
入場者数：893人
企画：京都市立芸術大学ギャラリー@KCUA
主催：京都市立芸術大学



写真 来田 猛
Photos by Takeru Koroda

@KCUA OPEN CALL EXHIBITION

申請展

「申請展」とは、京都市立芸術大学の修了生・卒業生・教職員・在学生を対象とした企画公募により、@KCUA運営委員会による審査を経て選出された展覧会です。大学の附属施設である@KCUAでこそ実施可能な実験精神に溢れた企画や、若手作家による意欲的な企画などが優先して採択されています。

(前年度9月に公募を実施)

川嶋 渉、笹岡由梨子、ウーカシュ・スロヴィエツ、高田冬彦、
TOBOE (西條 茜+パロンタン・ガブリエ)、ピョートル・ブヤク、
アリツィア・ロガスルカ、コレクティヴ・ワスキ

Piotr Bujak, Wataru Kawashima, Alicja Rogalska, Yuriko Sasaoka, Lukasz Surowiec, Fuyuhiko Takata,
TOBOE (Valentin Gabelier and Akane Saijo), Kolektyw Laski

Lost in Translation

Lost in Translation

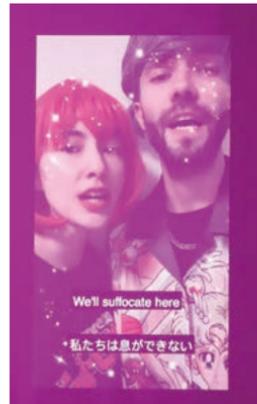
2021.9.1 Wed.-9.19 Sun.



TÔBOE (西條 茜+パロンタン・ガブリエ Valentin Gabelier and Akane Sojo)



高田冬彦 Fuyuhiko Takata





川嶋 渉 Wataru Kawashima



ピョトル・ブヤク Piotr Bujak



ウーカシュ・スロヴィエツ Lukasz Surowiec

2021年9月1日(水) - 9月19日(日)

Lost in Translation

展示室: @KCUA 1, 2, Gallery A, B, C

開催日数: 17日間

入場者数: 1,040人

キュレーター: バヴェウ・パフチャレク

企画: YPエンタープライズ

主催: 京都市立芸術大学

助成: 公益財団法人朝日新聞文化財団、

アーツサポート関西

協力: アダム・ミツケヴィチ・インスティトゥート

一般社団法人HAPS

関連イベント

・ 9月4日(土) 15:00-15:20

TÖBOE ライブパフォーマンス

出演: TÖBOE (西條 善&パロタン・ガブリエ)、

宮木亜葉

・ 9月19日(土) 15:00-15:20

TÖBOE ライブパフォーマンス

出演: TÖBOE (西條 善&パロタン・ガブリエ)、

黒川 岳、大井卓也

京都を拠点に活動する現代美術家/笹岡由梨子とポーランド出身のキュレーター/バヴェウ・パフチャレクの共同企画となる本展はCOVID-19のパンデミックが世界中に大きな影響を与える中で、様々な都市で活動する7組の作家と企画者との対話によって生まれたグループ展です。以下の三つの問いに答えるべく継続的に取り組んできた成果が示されました。

1. 大災害、大変動の時代に革命的变化を求める世相を追い風に、世界の価値観を刷新し、単に牧歌的・ユートピア的なヴィジョンではない、新しい持続可能なモデルを構築することは可能だろうか。
2. 資本主義を葬り、既存の不平等を是正して、より大きな社会正義が実現され、社会から排除されてきた集団も包括するような新しいシステムを提案することは可能だろうか。
3. 言語コミュニケーション上の齟齬、誤解、またそもそも失敗というカテゴリーは、芸術的実践の基礎となりうるだろうか。それは逆説的に、互いを知ることや相互理解の最良の方法にならないだろうか。

写真 中井友路
Photos by Tomonori Nakai

栗田咲子、菱木明香、リース直美

Asuka Hishiki, Sakiko Kurita, Naomi Reis

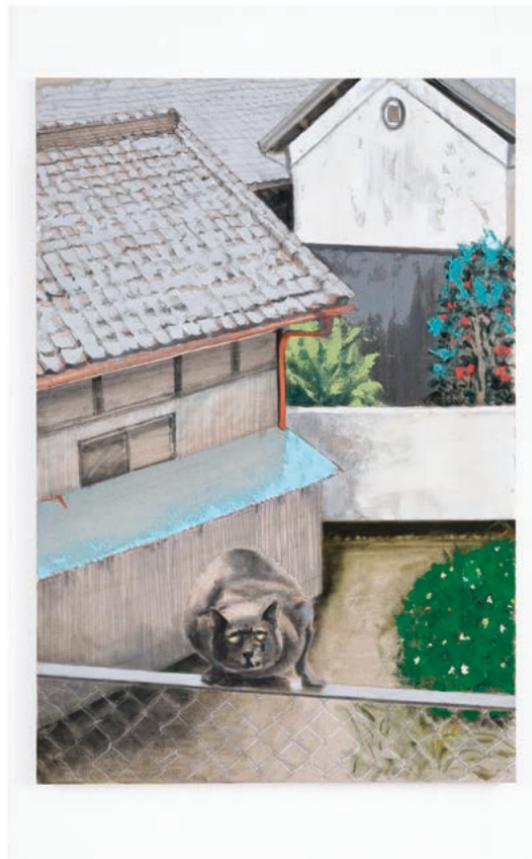
Still, life — まだ、生きてます

Still, life



2021.11.13 Sat.-12.5 Sun.

笹岡由梨子 Yuriko Sasaoka





静物画を英語で「still life」(動かない生命)と表すのはよく知られたことですが、例えばフランス語では「nature morte」、イタリア語では「natura morta」(死んだ自然)となることから、西洋では古来、動くものが生と見なされてきたのだと考えられます。一方、日本語で「still life」を「静かな物」と訳したのは、日本では八百万の神々として自然物や自然現象を神格化し、万事に命が宿ると考えられてきたことが関係しているのかもしれませんが、では、現代に生きる私たちは果たして「生」をどのように捉えているのでしょうか。

静物画 = still life、またその間にコマを入れて“Still, life”とすると「まだ、そこに命がある」「まだ、生きている」という意味に転じます。このたった一つの小さな記号が、言葉の意味を大きく変える力を持っているのです。日常的なものを起点として広がる世界を描く3人の作家、栗田咲子、菱木明香、リース直美によって企画された本展では、こうした言葉遊びを手がかりとして、何気なく通り過ぎていく日常の中にある「生」とは何かを考えるアーティストのまなざしが示されました。

写真 来田 猛
Photos by Takeru Koroda

2021年11月13日(土) - 12月5日(日)
Still, life — まだ、生きてます

展示室: @KCUA 1
開催日数: 20日間
入場者数: 1,202人
主催: 京都市立芸術大学

関連イベント
・ 11月14日(日) 13:00-13:40
ギャラリートゥアー / 作家、キュレーターと展示を巡る

副産物産店 (矢津吉隆、山田 毅)

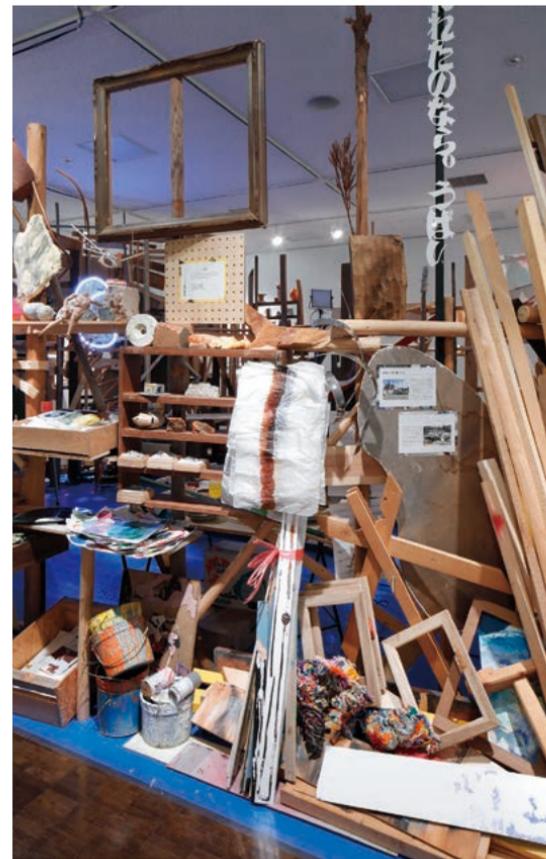
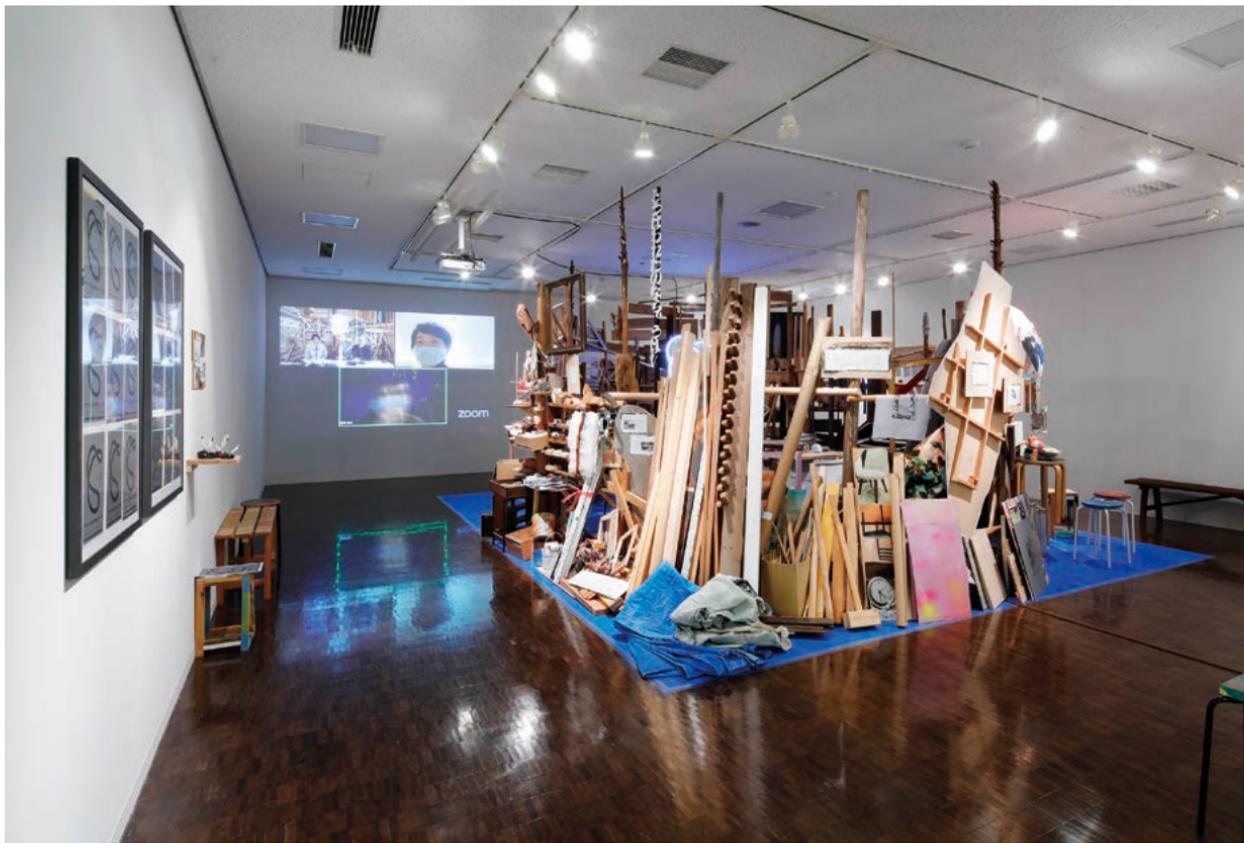
Byproducts Market (Tsuyoshi Yamada and Yazu Yoshitaka)

副産物産店の“芸術資源循環センター”展

Art Circulation Center by Byproducts Market



2021.11.13 Sat.-12.5 Sun.





京都市立芸術大学および京都市立銅駝美術工芸高等学校の移転計画に伴い組織された建築設計チームをきっかけとして生まれたプロジェクト「副産物産店（ふくさんぶっさんてん）」は、アートの現場から副次的に生まれる廃材を“副産物”と呼び、その副産物をアートの視点から利活用する資材循環プロジェクトです。今回の個

展では、京芸を中心にアートの現場のゴミ処理を巡る環境のリサーチとその周辺の人々（アーティスト、大学関係者、建築家、研究者など）との対話を軸に、移転後の京芸に向けての新しい機能として“芸術資源循環センター（Art Circulation Center）”のアイデアが提案されました。

2021年11月13日（土）-12月5日（日）
副産物産店の“芸術資源循環センター”展

展示室：@KCUA 2
開催日数：20日間
入場者数：1,300人
主催：京都市立芸術大学
協力：京都芸術大学ウルトラファクトリー
kumagusukuプロジェクト、修美社

関連イベント

- [副産物楽団ソンビーズ演奏会]
- ・11月14日（日）、11月28日（日） 各日14:00-15:00
出演：副産物産店、神林優美、高橋 萌、濱野萌々子、小出大道、土方渚紗、森川歩美、佐々木大空 ほか
 - [架空センター構想の対話]
 - ・11月13日（土）17:00-19:00
ゲスト：小山田 徹（美術家／京都市立芸術大学美術学部教授）、佐藤知久（文化人類学者／京都市立芸術大学芸術資源研究センター専任研究員／教授）
 - ・11月20日（土）17:00-19:00
ゲスト：藤原徹平（建築家／フジワラボ主宰）、大西麻貴（建築家／o+h共同主宰）、柳原充大（RAD／都市機能計画室）
 - ・11月27日（土）17:00-19:00
ゲスト：安居昭博（サーキュラーエコノミー研究者）
 - ・12月4日（土）17:00-19:00
ゲスト：森 純平（建築家、たいけん美じゅつ場 VIVA ディレクター）、五十殿彩子（NPO法人取手アートプロジェクトオフィス事務局、たいけん美じゅつ場 VIVA ディレクター）

写真 来田 猛
Photos by Takeru Koroda

3331 ART FAIR 2021

3331 ART FAIR 2021

大槻拓矢、岡本 秀、北浦雄大、藤田紗衣、山本真実江、吉田桃子

Sae Fujita, Yudai Kitaura, Shu Okamoto, Takuya Otsuki, Mamie Yamamoto, Momoko Yoshida



2021年10月29日(金) - 10月31日(日)
 (10月28日(木) プレビュー)
 3331 ART FAIR 2021

会場：3331 Arts Chiyoda Selection GYM
 (2F 体育館)
 開催日数：3日間 (+プレビュー1日間)
 主催：3331 Arts Chiyoda

京都市立芸術大学移転整備プレ事業

The Programs for the KCUA Campus Relocation

POP UP @KCUA: 大槻拓矢、森 夕香、矢野洋輔

Pop Up @KCUA: Yuka Mori, Takuya Otsuki, Yosuke Yano



2022年1月15日(土) - 2月13日(日)
 京都市立芸術大学移転整備プレ事業
 POP UP @KCUA: 大槻拓矢、森 夕香、矢野洋輔

展示室：堀川新文化ビルテング NEUTRAL
 開催日数：30日間
 主催：京都市立芸術大学
 共催：NEUTRAL

特別展 | Special Exhibitions

- 京芸 transmit program 2021
デザイン：仲村健太郎 | Designed by Kentaro Nakamura
- 『Suujin Visual Reader 崇仁絵読本』
刊行記念展
デザイン：松本久木 | Designed by Hisaki Matsumoto
- Slow Culture
デザイン：芝野健太 | Designed by Kenta Shibano
- チェン・ティエンジュオ
デザイン：松本久木 | Designed by Hisaki Matsumoto
- 京都市立芸術大学
芸術資料館収蔵品活用展「第十門第四類」
mamoru「おそらくこれは展示ではない(としたり、何だ?)」phase 0
デザイン：松本久木 | Designed by Hisaki Matsumoto
- mamoru
「おそらくこれは展示ではない(としたり、何だ?)」
デザイン：仲村健太郎 | Designed by Kentaro Nakamura



1 A4版フライヤー



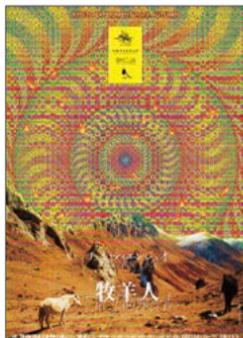
2 190 mm × 190 mm
仕上がり二つ折りフライヤー



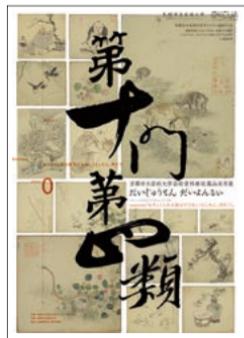
3 123 mm × 88 mmカード
蛇腹冊子 (1枚・12画)



7 A4仕上がり二つ折りフライヤー・封筒



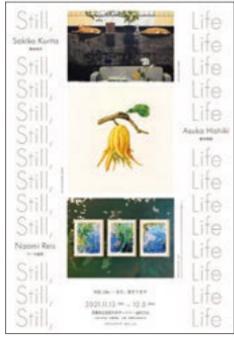
4 A4版フライヤー



5 A4版フライヤー



6 A4仕上がり二つ折りフライヤー (スクアカーブ)



8 A4版フライヤー



9 A4版フライヤー (裏ナラシに印刷)

申請展

KCUA Open Call Exhibitions

- Lost in Translation
デザイン：西田優子 (遊覧船グラフィック)
| Designed by Yuko Nishida
- Still, life — まだ、生きてます
デザイン：仲村健太郎 | Designed by Kentaro Nakamura
- 副産物産店の“芸術資源循環センター”展
デザイン：柳澤裕樹 (サクサクデザイン)
| Designed by Yuki Yanagisawa

書籍 | Books

Suujin Visual Reader 崇仁絵読本



判型：190 mm×190 mm
寸法：19 × 19 × 0.7 cm
カラー：フルカラー
ページ数：64 pp.

編集：ジェン・ポー、藤田瑞穂
挿画：森 夕香
協力：柳原銀行記念資料館、京都市立芸術大学・
京都市立銅駝美術工芸高等学校移転整備工事建
築設計JV
装丁・組版：松本久木
発行者：京都市立芸術大学ギャラリー@KCUA
発行日：2021年3月31日
言語：日本語、英語

京芸 transmit program 2021

判型：B5変形
寸法：26 × 19.8 × 0.7 cm
カラー：
ページ数：80 pp.

編集：藤田瑞穂
編集補助：伊藤学美、清田泰寛
写真：来田 猛
装丁・組版：仲村健太郎
印刷：株式会社ライブアートブックス（大神社）
発行者：京都市立芸術大学ギャラリー@KCUA
発行日：2021年8月10日

収録内容：藤田瑞穂「「ハリボテ」に潜む罫の中で」、
展示風景写真、作品図版、アーティストステートメ
ント、参考図版、作家略歴、会場マップ、トーク「棒
立ちとは何か?」（ゲスト：三監康生）、「京芸 transmit
program 2021」アーティストトーク記録、竹浪 逸
「異境訪問—「京芸 transmit program 2021」を
見る」、深谷訓子「コロナ禍中の「京芸 transmit
program 2021」を訪れて」
言語：日本語、一部英語



たねまきアクア08

判型：B6

寸法：12.3 × 18.2 × 0.2 cm

カラー：フルカラー

ページ数：32 pp.

編集：藤田瑞穂

編集補助：岸本光大

デザイン：仲村健太郎

発行者：京都市立芸術大学ギャラリー@KCUA

発行日：2021年10月31日

収録内容：たねまきアクアは、@KCUA (アクア) とその周辺に広がる創造活動の現在形、クリエイションが立ち上がろうとしているシーンを紹介していく広報誌です (不定期発行、無料)。

- ・ INTERVIEW @KCUA：「チェン・ティエンジュオ」
- ・ REPORT @KCUA：「Slow Culture」
- ・ STUDIO VISIT @KCUA：副産物産店 | 北山山間地域のアトリエ
- ・ SCHEDULE @KCUA：2021.4 - 2022.3
- ・ REPORT @KCUA：「ある探究のかたち—mamoru」と@KCUAの往復書簡から」

言語：日本語



『おそらくこれはアーカイブにはなり得ない (かもしれないが…そもそも言い切れない?) としたら、何だ?』
phase [記録/先送り]

フライヤーを再利用したスリーブ巻き/段ボール箱装/蛇腹折りご依頼書 (10pp.) / フライヤーを再利用したオイル漬けアーカイブ本 (40pp.) / QRカード / 緩衝材 / エディションナンバー・シリアルキーフレーズ付き

材料：【ナイロンポリバック】ポリエチレン、ナイロン【ナイロンポリバック内】音声、ハーバリウムオイル (ミネラルオイル (流動パラフィン、日本製、揮発性なし、粘度25℃、密度0.868g/cm³、流動点-12.5℃、引火点250℃以上、非可燃物)、紙、インク、ナイロン糸【箱・包装】紙、段ボール、インク

編集：mamoru、小林加代子、仲村健太郎

藤田瑞穂、松本久木

イラスト：松元 悠

写真：来田 猛

Web 設計：小林加代子、仲村健太郎

造本設計：松本久木

印刷・製本：有限会社修美社、有限会社松本工房

池田精堂、伊藤学美、藤田瑞穂

発行者：京都市立芸術大学ギャラリー@KCUA

発行日：2022年10月14日

言語：日本語



京都市立芸術大学ギャラリー@KCUAについて

京都市立芸術大学では、京都市西京区の学内施設として1991年より芸術資料館を開館し、陳列室で所蔵品の展示を行うほか、大小二つの学内ギャラリー、大会館など展示に使用できるスペースを持ち、また時にアトリエ棟や新研究なども活用しながら展示活動を継続しています。これらは作品鑑賞の機会を提供し、また学生たちの日頃の活動成果を公開する実験的発表の場としても機能しています。2010年春、京都堀川音楽高等学校の新築移転に伴って、その敷地内南側にギャラリー棟（堀川御池ギャラリー）ができ、そこに京都市立銅駝美術工芸高等学校と共に、京都市立芸術大学ギャラリー@KCUA（アクア）が2010年4月2日からオープンしました。

「@KCUA」は大学の英語表記「Kyoto City University of Arts」の頭文字に場所を示す「@」を加えたもので、音読みするとラテン語の「アクア=水」となります。生命を養う水のように、芸術が人々の暮らしに浸透し、創造力豊かな社会に貢献するという本学の理想を表現しています。アクア・プロジェクトとは「京都市立芸術大学の三つの機関、美術学部・音楽学部・日本伝統音楽研究センターが連携して、ユニークな芸術研究・教育の一端を地域社会に開いていく試み」として開始されたもので、当ギャラリーにも同様の意図が込められています。@KCUAに期待される役割には、以下の三つがあります。

1 教育・研究成果を広く市民へ公開すること

創立以来140年にわたって本学では、様々な成果を生み蓄積し、大学の内外で公表しています。京都市の中心部に発表の場ができたことによって、より身近な場で市民に公開できる機会が得られることになりました。ここでは在校生、教員および卒業生の研究成果に基づく展覧会、ワークショップ、講演・講座等を市民向けに開催すると共に、京都を中心とする産業界や教育機関、研究機関との連携プロジェクトの成果を発表することが期待されます。

2 芸術文化創出の人材交流の場とすること

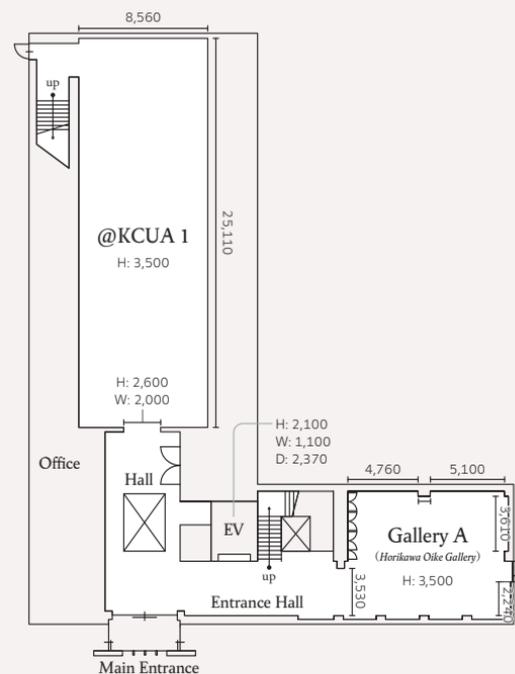
ギャラリーにおける展覧会、ワークショップ、講座等の企画に際し、成果の公表そのものを目的とするだけでなく、学内、同窓会、市民、産業界、教育関係諸機関、研究所などとの連携プロジェクトを通じて、広く人々が交流できる場を形成します。

3 芸術資源の連携活用のサテライト機能を果たすこと

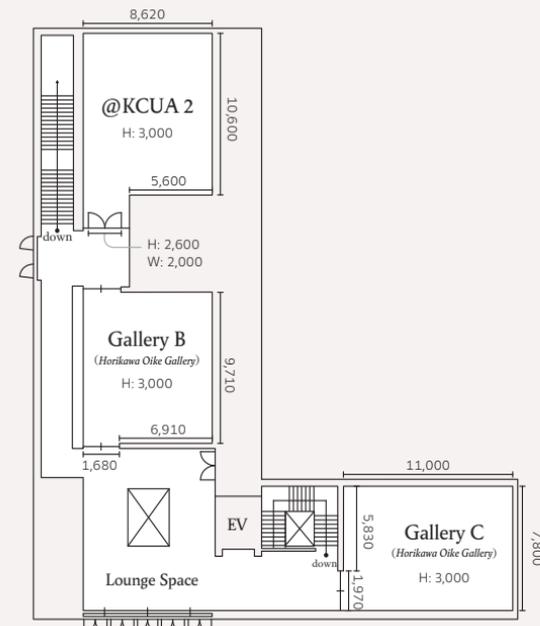
本学と市民、京都市、産業界、他の諸機関が連携するにしても、基盤となるのは、情報の収集と交換です。京都が有する芸術資源としての人、物、場所、風景や景観、技術、材料、暮らしの知恵に関わる情報を収集し、蓄積し、交流させる機関が必要となります。本ギャラリーは、衛星的な位置を利用して、情報の収集、蓄積、交換（発信と受信）の一翼を担います。

1/500

単位 | Scale: mm



1F



2F

委員長
鶴田憲次 | @KCUA長／堀川御池ギャラリー館長

委員
石原友明 | @KCUA担当理事
小山田 徹 | 美術学部長

栗本夏樹 | 美術研究科長

礪波恵昭 | 芸術資料館長

楠田雅史 | 美術学部広報委員会委員長

森野彰人 | 芸術資源研究センター所長

酒井健治 | 音楽学部教員

法貴信也 | 美術学部教員

佐藤知久 | 芸術資源研究センター専任研究員
／教授 (副委員長)

竹内有一 | 日本伝統音楽研究センター教員

藤田瑞穂 | @KCUA チーフキュレーター
／プログラムディレクター

岸本光大 | @KCUA 学芸員

後藤天平 | 事務局長

淵田聡子 | 総務広報課長

舟瀬伴子 | 連携推進課長

松井菜摘 | 附属図書館・芸術資料館学芸員

オブザーバー
天沼 憲 | 連携推進アドバイザー

@KCUA 長
鶴田憲次 (堀川御池ギャラリー館長 兼任)

@KCUA 担当理事

石原友明 (京都市立芸術大学美術学部油画専攻教授)

チーフキュレーター／プログラムディレクター

藤田瑞穂

学芸員

岸本光大

スタッフ

伊藤学美、清田泰寛

京都市立芸術大学ギャラリー@KCUA
2021年度 (令和3年度) 年次報告書

発行日：2023年3月31日

編集・発行：京都市立芸術大学ギャラリー@KCUA
Edited and published by Kyoto City University of Arts Art Gallery @KCUA

〒604-0052 京都市中京区押油小路町238-1
238-1 Oshiaburanokoji-cho, Nakagyo-ku, Kyoto 604-0052 JAPAN
PHONE: 075 253 1509
FAX: 075 253 1510
URL: <https://gallery.kcuu.ac.jp>

ブックデザイン | Book design
Studio Kentaro Nakamura (仲村健太郎+山本菜々子)

印刷 | Print
株式会社ライブアートブックス
LIVE Art Books Inc.

ISSN 2435-6018
©2023 京都市立芸術大学 Kyoto City University of Arts

<https://gallery.kcua.ac.jp>

